

考古学研究会70周年記念誌 考古学の輪郭

①募集要項

全体構成について

- 1 本企画は、考古学と隣接する分野に関するテーマについて、複数の論者がそのあるべき姿と研究の最前線を論じるものです。
- 2 原則としては、公募分も含め1テーマ2～3名の原稿数を基本形とします。多様な意見や考えの相違を明確化するという企画の都合上、1テーマにつき2名の打診・依頼を行う場合もあります。
- 3 1テーマに対し、内容的な重複が多い原稿については、Web版への掲載を検討します。

考古学研究会70周年記念誌編集委員会
Email 70ronsyuu@kokogakukenyukai-ict.jp
HP < <https://kokogakukenyukai.jp/> >

第1章 考古学と現代社会 ー博物館学・教育学・観光学ー

考古学は過去を考究する学問でありながらも、現代社会にまなざしを向けて、調査と研究を進め、その成果を世に問うてきた。本章では、「日本」考古学と埋蔵文化財行政が歩んできた来歴をたどり、将来像を展望する。また、研究成果公開と不離一体ともいえる、博物館学、教育学について、最新動向、あるべき連携の姿について、論考を募集する。さらに、考古学と遺跡の保存と活用、公開、情報発信に関するテーマを設定し、良質な事例を会員で紹介するとともに、今後の展望を記していただきたい。

章 節	No.	テーマ趣旨
1	1	「日本」考古学の特質
		世界の考古学研究を見渡した上で、「日本」考古学が持っている特質とは何か。学史、研究環境をたどり、将来像について展望を記す。
	2	埋蔵文化財行政と考古学
		世界有数の発掘調査件数を誇る日本の埋蔵文化財行政について、その現実と課題についての論考を募集する。先端的な取り組みや危機的な事例への対処など、埋蔵文化財行政に携わる会員諸氏にとって有益な論考を歓迎する。
	3	考古学と博物館
		2022ICOMプラハ大会において定義が更新され、博物館法が改正された現時点の視座に立ち、考古資料の展示、博物館における教育に関する良質な事例とともに博物館が抱える課題について論考を募集する。
	4	考古学と学校教育
		本会は、会誌(256号～261号)において特集「学校と考古学」を設けてきた。本テーマでは、その延長線上に、新型コロナ禍により新たに表出した問題と急速に進行したオンライン化の将来像を含め、論説を募集する。
	5	考古学と地域コミュニティ
		市民、地域コミュニティ、ステークホルダーに向けて、考古学的な調査や研究成果の還元について、良好な事例や特筆すべき事例とともに、今後のあり方を展望する論考を募集したい。
6	考古学とマスメディア	
	考古学の調査成果は、この半世紀、新聞等にとり上げられてきた。考古学とマスメディアの関係はどうあるべきか。その功罪とあるべき姿について省察する論考を募集したい。	
7	「陵墓」問題と考古学	
	本テーマでは、「陵墓」問題解説とともに、日本史と考古学の枠を超えた学際的な研究事例を紹介していただきたい。また、「陵墓」を保全する立場にたり、ステークホルダーを尊重する立場からの論考も募集したい。	
8	世界遺産と考古学	
	日本では、2022年7月現在、25件の世界遺産が登録されている。世界遺産登録推進運動の意義や問題、登録後の課題、教育・情報発信の重要性を含め、自由闊達な議論を募集する。	
9	考古学と遺跡保存	
	埋蔵文化財は常に破壊の危機に瀕している。遺跡保存の成功例、破壊を回避した取り組み、史跡化以降、良好に活用している事例など、史跡保存に関わるものに有益な情報と展望を募集したい。	
10	考古学と刊行物・広報・データベース	
	発掘調査報告書の情報整理(収集・配架・活用)は頭を悩ませる問題となっている。報告書のレポトリ公開や3次元モデルのオンライン公開など、考古学情報の公開、共有、活用のあるべき姿と良質な事例について論じる。	

第2章 日本と世界の考古学

本章では、世界各地域の考古学的様相と近年の研究動向についての論考を募集する。そして、「日本」考古学への提言についても論じて欲しい。ここでの対象地域は、日本を除く地域とする。例として、テーマでは東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジア、太平洋諸島、極北・東北アジア、西アジア、アメリカ大陸、欧州を挙げている。他地域を対象とする場合は、エントリーシートに地域名を記載されたい。

章 節	No.	テーマ趣旨
2	1	11 東アジア世界からの視点 日本列島と一衣帯水の関係にあった東アジア世界に関する考古学研究について、近年の研究動向や研究環境の差異を含めた論考を募集する。時代は問わないが、比較考古学の良質な事例研究を歓迎する。
		12 東南アジア考古学からの視点 東南アジア世界に関する考古学研究について、海域を通じた調査や研究の成果あるいは民族調査との融合的研究、遺産保存論といった成果に関する論考を募集する。
	3	13 南アジア考古学からの視点 南アジア世界に関する考古学研究について、例えば、環境適応や文明論、宗教図像や建築などに関する調査・研究成果について、概観できる文献や調査報告の紹介を含めた論考を募集する。
		14 中央アジア考古学からの視点 近年、調査成果が相次いで報告されている中央アジアの考古学研究について、文献や調査事例とともに、環境適応、東西交流論など、「日本」考古学との接点についても論じる論考を募集する。
	5	15 太平洋諸島からの視点 人類学、民族学、考古学における近年の研究動向とともに、文化遺産の保存と展望を含め、論考を募集する。
		16 極北・東北アジア世界からの視点 自然環境への適応、生業や民族移動など、極北・東北アジアに関する考古学的研究成果に関する論考を募集する。
	7	17 西アジア考古学からの視点 西アジア考古学は先史・古代を中心に理論面で「日本」考古学に多大な影響を与えてきた。ここでは近年の調査、分析の事例とともに新たな理論的展開について文献とともに紹介をいただきたい。
		18 北米大陸の考古学からの視点 調査・分析手法や研究環境の「日本」考古学との相違とともに、最新の研究関心や動向について文献や調査事例を盛り込んだ論考を募集したい。
	9	19 中南米大陸の考古学からの視点 理論・分析面において「日本」考古学にも影響を与えている中南米大陸の考古学について、最新状況とともに「日本」考古学への提言を含めた論考を募集する。
	10	20 欧州考古学からの視点 黎明期の「日本」考古学に多大な影響を与え、ともに発展をしてきた欧州考古学の現在とこれからの方向性について、文献や調査活用事例とともに論じる論考を募集する。

第3章 考古学と民族学・民俗学・地理学・ジェンダー研究

人間が創り出す文化は地域的にも時間的にも多様であり、そこに生じる様々な現象に各集団はそれぞれの方法・手段で対応してきた。本章では、考古学と対象資料や理論面で協業をなしてきた民族学、民俗学、地理学、ジェンダー研究に関する研究成果とその到達点に関する論考を募りたい。

章 節	No.	テーマ趣旨
3	1	21 旧石器時代・縄文時代と民族学 旧石器時代研究、縄文時代研究が、民族学との連携によって開拓した人文知、歴史像の構築について、最新の論考を募集する。なお、旧石器時代あるいは縄文時代の特定時期に限定した成果であることは妨げない。
		22 考古学と民俗学 民俗学の成果によって新たに考古資料や遺跡・遺構の解釈や意義が照射された研究事例など、民俗学と考古学の連携実績や将来展望に関する論考を募集する。
	23 考古学と地理学・景観学 分布論をはじめとして、考古学研究と連携してきた地理学、景観学の最新動向と「日本」考古学に対する提言について、論考を募集する。会員諸氏に向けて、概説的な文献や手法についても解説いただきたい。	

3	4	24	考古学と神話学 ともすれば忌避されがちであった神話学に関して、世界潮流とともに「日本」考古学との協業の事例や課題について、論考を募集する。
	5	25	考古学とジェンダー研究 ジェンダー研究の最新動向、そして「日本」考古学がそれにどのように貢献し、あるいは寄与する可能性があるのか、文献や事例紹介も含めた論考を募集する。

第4章 考古学と歴史学・美術史学

考古学は、その草創期から今日に至るまで、人類史あるいは過去の人びとの価値観の再構築という観点において、文献史学、美術史学とは切っても切り離せない関係であり続けてきた。考古学は、文献史学、美術史学との協業のもとで、いかなる成果をもたらしたのか、今後、いかなる関係をむすび、研究を進めていくべきかといった点を論じる。なお、時代の端境期に焦点を当てる場合は、エントリーシートにその旨、記載されたい。

章 節	No.	テーマ趣旨	
4	1	26	弥生時代における考古学と文献史 弥生時代の後半期になると、中国の文献記録の中に、当時の日本列島に居住した人間集団を意味する「倭人」あるいは「倭」が登場する。そこに記載された歴史イベント、あるいは地理・社会・風俗などに関する情報と、考古学的事実との対比が古くから試みられてきた。こうした研究の今日的な到達点と課題を論じる。
		27	古墳時代における考古学と文献史 古墳時代の開始からほぼ1世紀あまり、列島に関する記録は中国の歴史書から姿を消す。しかし、4世紀末以降は、中国・朝鮮・日本の文献記録を通じて、朝鮮半島への倭の進出、倭の五王の朝貢、部民や屯倉によるヤマト政権、倭王権の地方支配の進捗と、その間の国造の反乱、仏教などの新来文化の受容といった出来事が知られるようになる。こうした事象やその背景を、考古学ではいかにとらえてきたのか。その到達点と課題を論じる。
	3	28	飛鳥時代における考古学と文献史 飛鳥時代は、推古天皇が蘇我氏の基盤である飛鳥に宮をかまえることから始まり、聖徳太子による政治や制度、蘇我氏の権力拡大、大化の改新を経て、天武・持統朝には律令国家としてのかたが整えられた。この間、遣隋使・遣唐使の派遣、白村江の戦い、薄葬令、国家仏教の政策なども、物質文化にも強く影響を与えた。こうした出来事とそれに関する社会情勢を、考古学ではいかにとらえてきたのか。その到達点と課題を論じる。また、木簡をはじめとした出土文字資料による最新成果、考古資料との協奏によって明らかになった調査・研究事例に関する論考も歓迎する。
		29	奈良・平安時代における考古学と文献史 奈良時代から平安時代にかけては、列島内での支配領域が拡大する一方で、中央での政争がいくども繰り返され、律令の土地制度は徐々に崩壊し、これが荘園の発生、武士団の台頭へとつながっていく。この間、唐・新羅・渤海から北宋・高麗・遼へと外交関係も大きく変化した。こうした出来事とそれに関する社会情勢を、考古学ではいかにとらえてきたのか。その到達点と課題を論じる。
	5	30	中世における考古学と文献史 荘園公領制を基盤とする中世は、院政時代にはじまり、平氏が栄華を誇った時代、鎌倉幕府の成立、北条氏の台頭と執権政治、南北朝時代を経て、室町幕府の成立を迎え、戦国の世が展開していく。こうした動向と背後にある社会情勢を、考古学ではいかにとらえてきたのか。山城、集落、寺院、墓地など、良質な発掘調査とその分析事例、日本中世史との連携成果について、到達点と課題を論じる。
	6	31	織豊城郭史における考古学と文献史 織豊城郭は、それ以前の土塁や空堀で構成された城とは異なり、石垣や瓦葺の天守が頂上に建つといった特徴をもつ。織田信長やその家臣団、豊臣政権の大名などが各地にこの種の城郭を築いた。21世紀になり、目覚ましい成果をあげた織豊城郭研究の最新動向、注目すべき調査事例と必読文献を紹介する論考を募集する。

4	7	32	<p>近世における考古学と文献史</p> <p>近世は、織豊政権にはじまり、江戸幕府の成立を経て、幕藩体制、鎖国体制が確立し、そうした体制が崩壊するまでの期間にあたる。考古学では、城下町、大名墓、生活必需品、嗜好品などのさまざまな物質文化が研究の対象とされ、文献史学の成果との協業によって、多岐にわたる成果がもたらされてきた。その到達点と課題を論じる。</p>
	8	33	<p>近現代における考古学と保存問題</p> <p>黒船来航、明治維新を経て、日本は近代化の道へと突き進み、産業革命が進行するとともに、資本主義経済の社会へと大きく変貌し、その間、国際的な軋轢からいくどの戦争をも経験した。こうしたことを背景に生み出された物質文化は、今日、近代遺産や戦争遺跡として、考古学の研究対象とされ、さらには現代社会をよりよく生きていくために大切なものとして、保存・活用が叫ばれている。こうした研究には当然、文献史学の成果を参照することが不可欠である。その到達点と課題を論じる。</p>
	9	34	<p>考古学と美術史学</p> <p>考古学と美術史学は、その成立期こそ共通の関心に支えられていたものの、その後は別々に発展し、今日ではそれぞれが独立した学問領域として認識されている。しかし、いずれも物的資料を対象とし、観察に基礎を置くという点で共通する。遺跡から出土した遺構・遺物は、歴史復元のための資料という側面のほかにも、美術作品としての側面も有する。考古学は、美術史学との協業のもとで、いかなる成果をもたらしたのか。その到達点と課題を論じる。</p>

第5章 考古学と理学・分析科学

自然科学的分析は、考古学のみでは明らかにすることが難しかった暦年代論、原材料の産地同定、製作流通など、新たな学知の地平を拓いてきた。考古資料に関する自然科学的分析の手法とその成果の到達点、そして現在の課題について論じることを目的として、以下のテーマで論考を募集する。なお、以下のテーマ以外の遺物に関する分析科学の論考を希望する場合は、エントリーシートにその旨、記載をお願いしたい。

章 節	No.	テーマ趣旨	
5	1	35	<p>放射性炭素年代測定</p> <p>放射性炭素年代測定がもたらしてきた成果は、弥生時代や古墳時代の開始年代など、歴史像の再考を促してきた。そして日本のデータが更正曲線にも貢献している。こうした研究の最先端の状況を示す論考を募集する。</p>
	2	36	<p>分析科学(金属 青銅器)</p> <p>銅鐸、銅鏡をはじめとする青銅器は、考古学の主要遺物の1つである。こうした青銅器の産地や製作技術に迫りうる自然科学的分析は歴史像の構築にも大きく関係する。最新の分析科学の成果とその課題に関する論考を募集する。</p>
	3	37	<p>分析科学(金属 鉄器)</p> <p>鉄器の使用と普及はその効率から生産様式に強い影響を与え、生産と流通を支配することが権力の生成に影響したことは想像に難くない。自然科学分析はこうした鉄原料の産地や製鉄技術、鉄器生産と流通といった一連のダイナミクスに明らかにするという点で重要であるため、こうした研究の手法と成果、そしてその課題についての論考を募集する。</p>
	4	38	<p>分析科学(胎土)</p> <p>土器・土製品、瓦の胎土分析は、製作技術や産地の特定、搬入品の同定とその流通・交流の検討など多岐に渡り、一つの遺物・遺跡のみに留まらず広く人間活動とその社会背景を明らかにしてきた。歴史像の再構築を促した胎土分析にかかわる先導的な事例、現在の課題に関する論考を募集する。</p>
	5	39	<p>分析化学(玉類)</p> <p>装飾は人類を特徴付ける行為であり、玉類はその中核として現代に至っても珍重され続けている。近年の分析技術の向上は、玉類のより詳細な分類や産地の同定を可能としつつあり、先端的な研究事例とそれにより開拓された歴史像に関する論考を募集する。</p>
	6	40	<p>分析化学(石材)</p> <p>石器・石製品、石造物は考古資料の代表格であり、その観察は精緻を極めていく。そして、分析科学との協業によって、新たな展開もみせている。良好な分析事例や先端的な手法、課題などに関する論考を募集する。</p>

5	7	41	分析化学(繊維) 衣服に代表される繊維は人間の生活・文化・社会から不可分の存在である。これらの植物質・動物質繊維の材料や製作に関わる自然科学的分析の手法と研究の到達点に関する論考を募集する。
	8	42	分析化学(顔料) 水銀朱やベンガラといった顔料の自然科学的分析に関する研究について論じたものを対象とする。近年の分析技術の向上によって、元素分析による産地同定が広く行われるようになり、顔料の流通や使用についても検討が進みつつある。こうした分析手法とその成果に関する論考を募集する。
	9	43	分析化学(アスファルト) 接着剤としての役割が指摘されてから、その後交易・供給ルートなど、視点が拡大している素材である。ここでは、最近の事例・研究動向、今後の展望についてまとめた論考を募集する。
	10	44	三次元計測 近年、発掘調査の現場、遺物実測において様々な三次元計測が広く用いられるようになってきた。こうした手法の特徴や導入・活用の先端事例について紹介し、これからの考古学・発掘調査での「計測」という行為や普及・啓発での活用について示した論考を募集する。

第6章 考古学と環境学(地球科学)

本来的に学際的な学問である考古学は隣接諸分野とどのように連携し、新たな地平が開けるか。現在の課題を踏まえて展望を論じることとする。隣接諸分野の中でも、新たな分析法の開発が進んで新たな成果が次々と提示されて注目される「環境と考古学」に関わる分野に本章は焦点をあてる。願わくばそうした隣接諸分野からの考古学への期待と要望、あるいは考古学側からの要望も論じて欲しい。次の区分で各テーマを募集する。

章	節	No.	テーマ趣旨
6	1	45	考古学と古気候変動 21世紀になり、古気候変動分析は長足の進歩を遂げた。これにより考古学においても、社会変容・遺構・遺物の理解が大きく変わる例が現れた。古気候変動の分析法にかかる論考とそれを利用した考古学的論考を募集する。
	2	46	考古学と感染症学 新型コロナウイルス感染症による疫禍によって、社会は大きく変化した。疫病による社会への影響は過去からも存在した。過去の疫禍から学ぶ視点は多く、考古学においても座視すべきでない。ただ、疫禍を考古資料をいかに証明するかの議論は活発ではない。疫禍に関わる考古学的研究・人類学的研究・文献史研究あるいはそれらを総合化した論考を期待する。
	3	47	考古学と地質学 考古学と地質学の協業は古くて新しい課題である。土層の成り立ちや性質から、過去の土地利用を詳細に解明し、あるいは層序の正確な理解から遺跡・遺構・遺物の性格が解明されることもあった。21世紀における考古学と地質学の協業について、考古学側・地質学側からの原稿を募集する。
	4	48	考古学と災害 地震活動・火山活動の活発化と温暖化に伴うと考えられる異常気象によって、毎年のように大規模災害が発生している。災害にかかる考古学研究は現代的課題にも寄与し、人類の進むべき姿を考える材料ともなる。災害考古学に関わる学際的研究に関して原稿を募集する。
	5	49	考古学と森林科学 ヒトは周囲の環境に影響を受け生活を形作り、また環境を利用・改変しうる生き物である。近年、マクロ・ミクロ視点の双方から植生環境が復元されている。森林科学からみた当時の植生環境と人間社会との関係性について論じた論考を募集する。
	6	50	考古学と海洋学 近年、日本列島においても海洋考古学的調査が進み、新たな調査・研究法と20世紀にはなかった成果が開陳されている。その調査・研究における最前線の現状と今後の課題について論じる。

第7章 考古学と自然人類学

本来的に学際的な学問である考古学は隣接諸分野とどのように連携し、新たな地平が開けるか。現在の課題を踏まえて展望を論じることとする。それにあたり、次の区分で各テーマを募集する。

章 節	No.	テーマ趣旨
1	51	<p>形質人類学的研究1</p> <p>これまで、人の骨格形態に主眼をおいた研究では、時期的特徴のみならず地域的あるいは各遺跡の特徴についても成果が蓄積されてきた。また、特定の遺跡では、三次元データを用いた分析も散見される。ここでは、人の骨格形態にかかわる論考を対象とする。本テーマにおける近年の研究動向と、考古学との今後の協働の在り方について述べた論考を募集する。</p>
	52	<p>形質人類学的研究2</p> <p>近年、古人骨から人口変動、暴力、疾病、その他の生活様式の変化などについて国内外問わず多くの研究がなされている。ここでは、「形質人類学1」の内容以外の、古人骨からみた過去集団に関する研究を対象とする。（*疾病の中でも感染症に関しては第6章も参照。）古人骨からみた集団研究の意義と、考古学との協働のあり方について述べた論考を募集する。</p>
2	53	<p>DNA分析からみた考古学</p> <p>近年、ヒトDNAの分析によって、人の時空間的動態や、関係性について、データが蓄積されている。こうしたヒト遺伝子からみた過去集団に関する研究についての近年の研究動向について論じるとともに、過去の復元における本研究の意義・展望についての論考を募集する。</p>
	54	<p>考古学からみたDNA分析</p> <p>近年、DNA分析から集団関係について様々な知見が蓄積されている。ここでは、考古学からみたDNA分析の成果と考古学のコミットメントを論考を対象とする。近年の協働、および考古学からみた今後の協働のあり方についての論考を募集する。</p>
7	55	<p>考古学と植物学1: 植物遺存体からみた生活環境</p> <p>ヒトの生活環境を知るうえで植物遺存体研究が不可欠なものとなり、多くの調査報告例が蓄積されてきた。ここでは、植物遺存体そのものの分析で得られる資源利用の研究成果について幅広く紹介するとともに、考古学との協働や今後の展望について論じた論考を募集する。</p>
	56	<p>考古学と植物学2: 植物圧痕からみた生活環境</p> <p>近年、資料そのものは回収されないが土器に残る植物圧痕の調査成果の蓄積により、栽培植物や農耕起源研究が大きく進展している。ここでは、これらの近年の研究動向を幅広く解説するとともに、今後の可能性や展望について論じた論考を募集する。</p>
4	57	<p>考古学と動物学1: 動物遺存体からみた海産資源利用</p> <p>ヒトの生活環境や動物との関わりを知るうえで動物遺存体の微細資料の回収や調査報告例が蓄積されてきた。ここでは、近年の海産資源に注目した研究動向とともに、今後の考古学との協働のあり方について論じた論考を募集する。</p>
	58	<p>考古学と動物学2: 動物遺存体からみた陸産資源利用</p> <p>ヒトの生活環境や動物との関わりを知るうえで動物遺存体の丁寧な回収や調査報告例が蓄積されてきた。ここでは、近年の陸産資源や家畜化に注目した研究動向を論じるとともに、今後の考古学との協働のあり方について論じた論考を募集する。</p>
5	59	<p>植物の(考古)生化学からみた食環境</p> <p>近年、動物資料だけでなく植物資料を対象とした生化学分析によって、植物利用の実態を議論することが可能となってきた。こうした研究動向を幅広く解説するとともに今後の研究の可能性と考古学との連携の在り方について論じた論考を募集する。</p>
	60	<p>動物の(考古)生化学からみた食環境</p> <p>近年、動物資料を対象としたさまざまな生化学の手法から、ヒトの食性やそれらに係わる移動やモノの流通などの研究が進められている。ここでは、近年の研究動向を幅広く論じるとともに、考古学への今後の展望や連携の在り方について論じた論考を募集する。</p>